

# 「宮崎史学」の達成と課題を読み解く

井上文則著

天を相手にする

評伝 宮崎市定



四六判 440頁  
 国書刊行会  
 [本体 3,600円 + 税]

佐藤 信弥

「京都学派」に属する東洋史学者として、宮崎市定（以下、宮崎と略称）は著名な存在であり、近年もその著書の文庫化や文庫版の復刊が進められているが<sup>①</sup>、これまでその評伝や専門が専著としてまとめられてこなかった<sup>②</sup>。これは「京都学派」の宮崎の先達である内藤湖南に関して、専著として複数評伝などが刊行されているのとは対照的である<sup>③</sup>。本書はその宮崎の初の本格的な評伝となる。

著者井上文則氏の専攻は東洋史ではなく古代ローマ史であるが、本書の「あとがき」によれば、大学学部時代以来の「宮崎ファン」ということである。特に井上氏の一一般書『軍人皇帝のローマ』では、ローマ史の流れと中国史のそれとを比較し、両者の間に大帝国の分裂傾向や異民族の侵入といった類似する現象が見られると認識したり<sup>④</sup>、ローマ史のイリュリア

人（バルカン半島出身の軍人貴族）を中国史の武川鎮軍閥と比較し、両者の果たした歴史的な役割が似ていると指摘し、イリュリア人を宮崎の『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』（以下、宮崎の論著についての出典は省略する）でいう「素朴民族」と位置づけようとしたり<sup>⑤</sup>、宮崎の研究成果や手法を参考にした部分がある。また宮崎に関して、研究ノート「宮崎市定と西洋古代史研究」を発表している<sup>⑥</sup>。

本書は以下の全八章構成で、宮崎の生涯と業績を追っている。

- 第一章 千曲川の畔——飯山時代（明治三十四年～大正八年）
- 第二章 山出しの青年——旧制松本高等学校時代（大正八年～大正十一年）

第三章 優れた師の下で——京都帝国大学文学部での学生

時代（大正十一年～大正十四年）

第四章 ごく上々な門出——大学院から旧制高校の教授

（大正十四年～昭和九年）

第五章 鼻息の荒い時代——京都帝大の助教授、フランス

留学（昭和九年～昭和十三年）

第六章 国策に従事して——京都帝大の助教授から教授へ

（昭和十三年～昭和二十年）

第七章 地味な宮崎——京大教授時代（昭和二十年～昭和

四十年）

第八章 江湖の読者に迎えられて——停年後の宮崎（昭和

四十年～平成七年）

本書の特徴は、宮崎の生涯を追うとともに、個々の学説が形成された学問遍歴を丁寧にとどけている点、そして『論語』や七支刀銘文の読解をめぐる問題など宮崎の研究への批判、あるいは大東亜共栄圏構想のような戦時中の国策との関わり、『アジア史概説正編』での盗用疑惑、学士院賞事件といったトラブルや、本書評で後述する貝塚茂樹との軋轢のような、どちらかといえばゴシップに属することも避けずに扱っている点、宮崎の論著や学説、関係する論争について網羅的に扱っ

ている点の三点である。

たとえば宮崎の『アジア史概説』『中国史』などの通史や概説書に見える、中国史を世界史の中に位置づけて議論するという発想がどのように育まれたかをたどってみよう。まず第三章で島田虔次の言を引き、宮崎が中国史と西アジア史の総合・結合をめざしたのは、桑原隲蔵の「東洋史学」の方向性と共通しており、彼の影響によるものであるとする。そして宮崎が「都市国家」「宗教改革」「ルネサンス」といった西洋史の概念を東洋史に用いたのは、西洋史の原勝郎が日本の鎌倉新仏教の出現を西洋史の概念である「宗教改革」という言葉でもって説明したような姿勢を受け継いだのであると指摘する。ついで第四章では、宮崎の旧制高校教授時代、第六高等学校では東洋史の講義を通じて唐とローマ帝国との類似性に注目し、第三高等学校で東洋史とともに西洋史の講義も担当したことで、東洋史と西洋史の関係を真剣に考えるようになったことが述べられる。第五章では、昭和六年の榊亮三郎による京都大学夏期講座「上世波斯と古代印度、中世波斯と支那日本」の受講により、東洋史と西洋史が西アジアを介して繋がっていたという視点を獲得し、これが西アジアを中心とする世界像を提供したという点で、宮崎の世界史観構築に決定的な影響を及ぼしたと評価する。

そしてフランス留学では、当時現地で流行していた東西交渉史の研究の影響を受け、留学の成果として「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」を発表することとなる。第五章では、この論考の中で宮崎が世界史の理解にあたってペルシャ及びイスラム世界（西アジア）・東洋・西洋の三つの地域区分と、都市国家から大帝国内に至る時代としての古代、地方分権・宗教の強大化・「夷狄」の侵入によって特徴づけられる中世、宗教改革とルネッサンスによって始まる近世の三つの時代区分を提示し、この三地域が相互に影響しあい、とりわけ進んだ社会が遅れた社会に影響を与えたという歴史観を展開していることにより、これを自己の世界史観を提示し、確立したものととして評価する。また、この論考が書かれた背景として、当時西田幾多郎門下の哲学分野の「京都学派」の学者たちの間で世界史や世界史の哲学が熱心に語られ、日本を中心とするアジアが主体的な役割を担う世界史とそれを成り立たせる哲学を模索していたことが関係しているのではないかと指摘する。こうした宮崎の学問遍歴が後の通史本や概説書に反映されていくわけである。

筆者（佐藤）は、考古学による発掘の成果や甲骨・金文のよくな出土文献の活用が求められる中国先秦史を専攻していることもあり、宮崎がそうしたものに対して冷淡な態度をとっ

たのにはどういう事情があるのか今まで疑問に思っていたが、本書によってその経緯をたどることができた。まず第三章で、宮崎の学生時代に法隆寺の再建・非再建論争が盛んであったことが触れられている。宮崎は建築史の観点からの天沼俊一の非再建論と、文献史料に基づく喜田貞吉の再建論の双方に接し、後に再建論が正しいとわかったこともあり、この論争を通じて実物に対する文献史料の優位を確信するようになったという。出土文献については、同じく第三章に宮崎が狩野直喜より敦煌文書を史料とする西域研究に手を出すことを戒められたというエピソードが見え、宮崎がこうした出土文献に冷淡であったのは、既存の研究資料でも見方を変えて新しい考えを出せばいくらかでも研究できるという濱田耕作の指導の影響があったと指摘されている。第四章によると、「紙上考古学」が展開される宮崎の論考「支那城郭の起源異説」は、発表当時濱田耕作に褒められたという。

同じく京都大学に在籍していた貝塚茂樹の研究成果を無視するかのような「西周抹殺論」を宮崎が主張した理由については、筆者は宮崎と貝塚の仲がよくなかった旨側聞していたが、その詳しい事情までは知らなかった。第四章及び第七章では、中国古代の都市国家論が宮崎の独創によるものなのに、貝塚がこの点を認めておらず、貝塚自身の説であるかのよう

に扱われていたことに対して宮崎が不満を持っていたという事情が紹介されている。

このように、本書は「宮崎史学」に対する読者の関心の持ちようによってそれぞれ発見をもたらしてくれるものになっている。ただ、読者の関心に応じた読みに対応するための措置、たとえば人名索引などが備えられていないのが残念である。あるいは宮崎の「編年史」として年代順にまとめられた本編に対して、事項別の「紀事本末」的な索引があってもよかつたかもしれない。宮崎あるいはその学問に対する網羅的・総合的評伝となつている本書に対し、今後は宮崎の個別の研究動向に対する各論・専論の充実が求められるであらうし、本書は「宮崎史学」の達成と課題を議論するための有用な参考文献となるはずである。

### 【注】

- (1) 宮崎市定『中国史』(上)(下)(岩波文庫、二〇一五年)、宮崎市定『大唐帝国——中国の中世』(中公文庫プレミアム、二〇一八年)、宮崎市定『アジア史概説』(中公文庫プレミアム、二〇一八年)など。
- (2) 短篇の評伝としては、たとえば礪波護「宮崎市定」(『20世紀の歴史家たち』(1)日本編上)刀水書房、一九九七年)がある。

- (3) 三田村泰助『内藤湖南』(中公新書、一九七二年)、粕谷一希『内藤湖南への旅』(藤原書店、二〇一一年)、高木智見『内藤湖南——近代人文学の原点』(筑摩書房、二〇一六年)など。

- (4) 井上文則『軍人皇帝のローマ——変貌する元老院と帝国の衰亡』(講談社選書メチエ、二〇一五年)、一九一—二〇頁。

- (5) 井上文則前掲『軍人皇帝のローマ』、一二四—一二六頁。

- (6) 井上文則「宮崎市定と西洋古代史研究」(『西洋古代史研究』第一五巻、二〇一五年)。

(さとう・しんや 立命館大学)